

大学進学における進路選択プロセスに関する研究 —日本高校生の情報収集活動を中心に—

○林 如玉 (東北大学)

倉元直樹 (東北大学)

キーワード：大学進学，情報収集，学年差

問題と目的

日本では大学入試制度の複雑化が進んでいるため、受験生に対する大学情報の重要性も高い。大学関連情報を提供する重要性は臨時教育審議会第 1 次答申(臨時教育審議会, 1985)で既に提唱されていたが、現在の日本の大学にとって「入試広報活動は欠かせないものとなっている(倉元・泉, 2014)」。高校生の大学選択プロセスを明らかにするには、生徒における大学広報の利用に関する研究は重要だと考えられる。中でも学年別に情報収集活動の特徴を把握する必要があると思われる。

寺下・村松(2009)は大学案内等の印刷物やホームページ等を通して受験生に伝える広報活動を「発信型広報」と呼んだ。一方、受験生と直接に関わり情報を伝わる広報行動を「対面型広報」と呼んだ。寺下・村松(2009)のこの分類法は倉元・泉(2004)の研究でも使われている。

本研究ではそれを参考に高校生の情報収集活動を「対面型情報探索活動」「発信型情報探索活動」と二分する。両者について高校生の情報収集活動の特徴に焦点を当てて分析を試みる。

方 法

2019 年 2 月～4 月に日本全国 11 校の高校生を対象に、ウェブにおけるアンケート調査を行った。調査実施は各高校の担当教員に依頼し「研究協力をお願い」を調査対象者に配布した。調査サイトへのアクセスは任意とした。調査対象者数は総計 8,170 名(1 年生が 2,735 名, 2 年生が 2,382 名, 3 年生が 1,535 名)であった。本報告で分析に用いた項目は学年、対面型情報探索活動と発信型情報探索活動に関係する部分である。

結果と考察

対面型情報探索活動の学年差

対面型情報探索活動は、得点が高いほど該当の活動への参加頻度が高いことを意味する。各活動への参加頻度と学年のクロス集計表を作成し、カイ 2 乗検定を行ったところ、「キャンパス見学」には有意な差が見られなかったが、他の活動についていずれも有意差が得られた。すなわち、「オープンキャンパスへの参加 ($\chi^2(4)=22.67, p<.01, \phi=.15$)」「大学教員の出前講義や講演会への参加 ($\chi^2(4)=40.11, p<.01, \phi=.19$)」「卒業生による講

演会への参加 ($\chi^2(4)=38.99, p<.01, \phi=.19$)」「進路説明会 ($\chi^2(4)=25.51, p<.01, \phi=.16$)」に学年差が見られた。残差分析(5%水準)を行った結果、1 年生が高い頻度対面型情報探索活動に参加していることが分かった。逆に、2, 3 年生では対面型活動への参加頻度は低くなる。

発信型情報探索活動の学年差

発信型情報探索活動も、対面型と同様に得点が高いほど、該当のメディアの利用頻度が高い。各発信型メディアの利用頻度と学年のクロス集計表を作成し、カイ 2 乗検定を用いて検定した結果、いずれも有意差が認められた。「大学のホームページ ($\chi^2(4)=79.08, p<.01, \phi=.27$)」「インターネット ($\chi^2(4)=45.95, p<.01, \phi=.21$)」「大学情報に関する雑誌や本 ($\chi^2(4)=29.48, p<.01, \phi=.17$)」「大学のパンフレット ($\chi^2(4)=115.24, p<.01, \phi=.33$)」の全てに学年差が見られた。残差分析(5%水準)を行った。その結果、発信型の各メディアに関して、高い頻度で利用する 1 年生の数は相対的に少なかった。逆に、2, 3 年生になると、各メディアを高い頻度で利用する割合は増加傾向にある。

全体的特徴

発信型情報探索活動と対面型情報探索活動の各活動の得点を標準化し、学年ごとの Z 得点の平均値を計算した。結果は Figure 1 で示す。

以上の結果より、情報収集活動における高校生の大学選択は以下のようなプロセスを辿ると推測される。1 年時には大学のイメージを把握するために活発に対面型情報探索活動を行う。その上で、2, 3 年生になると、自分の関心がある大学に関するより詳細な情報を求め、発信型情報探索活動による情報収集活動へと移行していく。

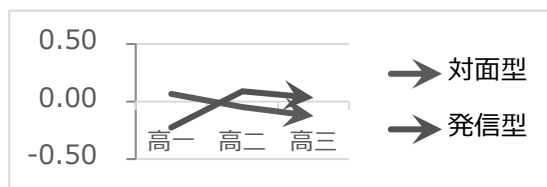


Figure 1 情報収集活動の Z 得点

付 記

本研究は JSPS 科研費 19H05491 の助成に基づく研究成果の一部である。